

土耳其

滞在一ヶ月

埃及

パレスタイン

シリヤ

滞在一ヶ月

イラク

波斯 滞在一ヶ月

印度 滞在一ヶ月

(歸路)

青山は時に三十才。新進気鋭の学徒であった。予定していたシベリヤ經由が露支間情勢悪化のため変更となり、彼は八月一日神戸より伏見丸で出発した。この大旅行については帰国後『東京美術学校校友会月報』第三十卷第二、三、五、六、八号、第三十一卷第一、二、四、六号に寄稿した「ペルシア旅行記」(一)(九)によってその一部を知ることができる。彼はロンドン滞在中にペルシア旅行の準備を整え、モスクワへ行き、十一月十七日に目的地へ向けて旅立った。キエフ、オデッサ、クリミア半島、バクー、パーレヴィイを経て十二月十日テヘラン到着。十日ほど滞在し、カズヴィンを経てハマダーンに行き、四日間滞在し、ビストウン、ケマルンチャー、カスル・イ・シリーンを旅して大晦日にテヘランへ戻った。その後さらに各国の遺跡をめぐり、多数の資料を携えて帰国したのは昭和五年五月六日であった。翌六月には帝国美術院附属美術研究所員となり、十年本校教授、帝国美術院主事となったが、本校の方は同年内に辞任している。同二十年に至り、このペルシア旅行における収穫

に基づいて『イラン芸術遺蹟』(美術書院)を出版し、イラン美術に関する本邦人最初の仕事として高く評価された。

⑥ 齋藤佳三の中国派遣

昭和四年八月、図案科講師齋藤佳三(本名佳藏)は正木直彦校長の依頼により南京政府直轄の国立芸術院の図案科教授として派遣されることになった。正木の『十三松堂日記』を見ると、杭州領事から外務省文化事業部に本件に関する依頼があり、それが正木に伝えられ、先ず渡辺香涯が候補に上がったが、彼が辞退したため田辺孝次が選ばれた。しかし、田辺は「意動きたれと圖案科にあらざれば」とて齋藤を推薦したので、齋藤が行くことになったという経緯が判る。同年十月一日の『東京朝日新聞』はこれを次のように報道した。

支那の藝術院へ齋藤氏招かる 新設圖案部主任に 國民政府最初の邦人教授

一昨年支那杭州西湖畔に建設された國立藝術院大學では今回美術科圖案部を新設し、主任教授を日本から招聘することとなり推薦方を外務省に頼んで来た

國民政府になつてから邦人教授派遣はこれが初めて同省ではその人選上極めて慎重な態度をとり一切を正木美術學校長に託して選考中のところ現同校講師で新進工藝美術家齋藤佳三氏を選定推舉した

氏はかねてより組織工藝の研究で聞え昨年帝展には一大室内組織

装置を出品し意表に出た人である、工藝美術家には珍らしい能働的な人で絶えず新しい意慾に新らしい研究と製作を示し支那の大陸性に應じては又よくその本質を探索新らしい動機と發展を極めることだらうと期待される、目下今年度帝展出品のために純日本式室内装置の製作中で完成は入後本月十日頃赴任の途に上るさうである

齋藤氏は語る『今度私が突然圖案部主任となつてゆく支那國立藝術院大學は一昨年創立で支那の美術界では最高權威で、圖案部はこの九月から開かれたのです 現在支那には新しい形式による西洋の圖案に關して適當な人が居ないので我國から招聘することになつたのでせうが國民政府になつてから私が始めてですから少し氣味が悪いのですが、折角ゆくのですから私の知つて居ることは全部支那の人々に傳へたいと思つて居ります』

齋藤は一年間滞在の予定で十月二十日に中國へ向けて出発した。彼は翌五年末に歸国するが、その年の六、七月には國立藝術院の芸術教育・文化視察団の一員として一時歸国した。この視察団は芸術院長林風眠、林文鏞、蔡威廉（蔡元培の娘）、潘大樹、李樹花、李鳳白、王子雲、齋藤佳三および通訳官凱慰宸らから成り、外務省対支文化事業部と大阪毎日新聞社の後援の下に來日したもので、六月二十九日神戸着、三十日東京、七月八日から十日間、東京府美術館で同院教授らの作品展を開いた。これについては『東京美術学校校友会月報』第二十九卷第四号も次のように報じている。

中華民國々立西湖藝展 七月八日より十七日まで、東京府美術館に於て開催、齋藤佳三氏の盡力により烏叔養、李朴園、房品章、陳盛鋒、劉文如、趙人馨、李風白、李超士、王子雲、林風眠、王靜遠、吳大羽、蔡威廉、潘天授、齊白石、王子雲等諸氏の油繪、水彩、バステル、國畫、及び彫刻等百二十點を展觀せり、尙別室に於て中華農民手工藝品及大衆文具を即賣したり。

⑦ 昭和初期の鑄造科

清水巖氏（昭和六年鑄造科卒）の了解を得て、氏の「鑄金閑話」『萌芽』三三六号、三三四号、昭和五十七年十一月、五十八年九月）を要約して掲載する。

学校の門を入ると守衛所があつて、表は黒字、裏は赤字の名前を書いた木札が建物の壁に掛けてあり、学生は登校時に表を出し、下校時に裏返しする。先生の木札は小形で守衛の机の上にあつて守衛が操作した。今の音楽部のところが木造二階建の工芸部で、二階は図案科と漆工科、一階は鑄造科と鍍金科と彫金科だった。鑄造科の教室の裏手に別棟で鑄造場があつて、土手の植込垣根までのびていた。

大島如雲先生は蠟型鑄造の大家で、蜜蠟で原型を造る名人だった。それに鑄物土をかぶせ、乾燥後に蠟を溶かした空洞に熔融した金屬を注入して鑄造する。これは鶯の足、鷹の足、雀の足と蜜蠟でまたたくまに造つて、造り方を教えられた。洋服姿は見たことがなく、いつも折り目正しく着物を着ていた。着流しで来ると、守衛所